

奥山 眞紀子

医学博士、小児科専門医、子どものこころ専門医、日本小児精神神経学会認定医  
東京慈恵会医科大学卒業、同大学院博士過程修了。睡眠の研究で博士号取得。埼玉県立小児医療センター神経科医員を経て、米国ボストンのタフツ大学附属病院小児精神科へ留学。留学中、ボストンカレッジにて、小児思春期カウンセリング学修士号取得。帰国後、埼玉県立小児医療センターで精神保健を担当し医長、副部長を経て、2002年3月、国立成育医療センター（2010年度より独立行政法人 2015年度より国立研究開発法人 国立成育医療研究センターに名称変更）こころの診療部長となり、現在に至る。2014年5月より2017年3月まで特命副院長を兼任。2018年度より統括部長と名称変更。2019年退職後、社会福祉法人子どもの虐待防止センター（CCAP）子どもと家族のメンタルクリニッククリニックやまねこ等での診療に加えて、本年度から委託医師として週3回世田谷区児童相談所で勤務している。

専門は、小児精神保健、子ども虐待、子どものトラウマなど。

NPO法人埼玉子どもを虐待から守る会会長、日本トラウマティックストレス学会理事長、日本小児科学会理事、日本小児精神神経学会常務理事、日本学術会議連携会員、厚生労働省「新たな社会的養育のあり方検討会」座長等を歴任。

現在は、日本子ども虐待防止学会（JaSPCAN）理事長、日本子ども虐待医学会（JaMSCAN）副理事長、社会福祉法人子ども虐待防止センター理事、NPO法人埼玉子どもを虐待から守る会理事、厚生労働省社会福祉審議会児童部会「社会的養育専門委員会」委員、内閣府「子供・若者育成支援推進のための有識者会議」構成員等の役職を務めている。編著書は、「子ども虐待の臨床」（南山堂）、「病気を抱えた子どもと家族の心のケア」（日本小児医事出版社）、「アタッチメント」（明石書店）、「子どもの心の診療医になるために」（南山堂）、「虐待を受けた子どものケア・治療」（診断と治療社）など。

## 新型コロナ禍における子どもの健康

今年には新型コロナウイルス感染症というとてつもなく大きな問題に世界が揺れています。その中で、初期の何もわからなかったころに比べて、半年以上たってかなりのことがわかってきました。それにつれて、「未知」への不安が減少し、初期に多かったデマなどは少なくなり、少しずつ社会が落ち着いてきています。事実を知ることが重要なのは子どもも同じです。子どもにわかるように伝えてあげたいものです。

そして、不安になると、本来できていたこともできなくなり、それによる不利益も生じてきます。子どもにとっての不利益として、予防接種を控えるということが大きいことはこれまでの海外での感染症拡大時にも見られており、今回日本でも起きていることです。そのような不利益から子どもを守ることも大切です。

多くの子どもや家族のご協力で、子どもや家族のこころの問題に関しても明らかになってきました。かなり多くのお子さんやご家族が不安を強くしています。当然のことです。不安を持つのは当たり前ですが、それが不利益に繋がらないような努力も必要です。災害などの困難があると、本来は寄り添って「絆」を求めるのが人間です。しかし、感染症はその絆がマイナスに働くので、繋がる方法が少なくされてしまいます。「新しい生活様式」はまさに絆を作りにくくする生活でもあります。そんな生活の変化を強いられ、親も子もいら立っていることは少なくありません。夫婦喧嘩、親子喧嘩で警察に連絡することも増加しているようです。不安や苛立ちへの対処法が重要です。

今回は、感染症そのものを知ること、子どもにとって不利益となる予防接種控えの問題に関して、現在の家族の心の状況、心が安定した生活へのアドバイスを各専門家の先生にお話しいただくことができました。皆様のお役に立てれば幸いと存じます。